

本論文は、日本古代の芸能を形成する環境について神祇祭祀を中心に論じるものであり、その過程を通して芸能の社会的背景や機能など、芸能が有する歴史性の一端を明らかにすることを目的とするものである。

序章では、芸能史研究の整理、芸能研究の方法論および芸能の特質と祭祀のあり方について再検討を行った。そのうえで、芸能史研究の課題として、①芸能を発生・発展・変貌させる社会的環境、②芸能を媒介として形成される社会的関係、③芸能を担う人々と芸能を受容する人々との関係とその変化、④芸能を構成する道具や装置、⑤これまでの①から④の相互関係によってつくられる文化を国際的視野を通して比較検討する必要があることを提示した。(序章「本稿の目的と研究の意義について」)。

第一章では、神社に供奉する性別や年齢の異なる人々がどのように規定され、日常生活を送り、祭祀を執り行っていたのかについて、「烟」と「後家」のあり方を通して検討を行い、神宮の祭祀組織を考察した。その結果、「烟」は奉斎集団が祭祀に供奉する際の基礎的単位であり、一定期間神を祭るための集団を表す単位でもあること、「後家」は奉斎集団を供出する母胎であり、奉斎集団の妻子等による集団であり、祭祀に供奉するとともに奉斎集団が日常生活を営む建物でもあった。これらのことから、「烟」は奉斎集団の代表として神に供奉し、「後家」は奉斎集団の成員として祭料を供進する形態が神宮祭祀の組織と構造であることを指摘した。(第一章「日本古代の祭祀組織 - 烟と後家を中心として」)。

第二章では、祭祀における芸能の母胎である直会の役割について、直会が重層的に執り行われる神宮祭祀、とりわけ月次祭を中心に検討を行った。その結果、直会は祭祀の一連の流れの節目に行われる酒宴であり、祭祀に供奉した人々によって形成されるコミュニティの空間であり、社会的関係を再確認する場所でもある。そのため、直会を重層的に執り行うことは、直会に参加する人々の間に祭祀に対する共通の認識を形成し、祭祀の運営・維持を可能にするとともに、祭祀を通して確認される社会的関係の正統性を保証するものであることを指摘した。ただし、直会が執り行われる場所とそこに供奉する人々との関係をを中心に論じたため、直会に用いられる祭料(直会料)との関係については言及することができなかった。祭料の弁備と使用のあり方を明らかにすることは、重層的に執り行われる直会の性格を考える上で重要な要素であり、その検討は今後の課題としたい。(第二章「日本古代祭祀における直会 - 神宮月次祭を中心として -」)。

第三章では、祭祀における芸能の形成について、鎮魂祭と神楽という「祭祀」と「芸能」を中心に検討を行った。その結果、鎮魂祭の中核をなす「式次第」であり「神事」に相当する「奏楽」と「鎮魂」を神楽の原形として理解することが可能である。後に「鎮魂」の次第に続いて「盃事」の次第が追加されるが、この「式次第」の追加は神楽の構成が「神事」から「神事 - 盃事」へと移行する過程であり、神楽が整備され体系化される過程でもある。それは神楽という芸能の形成・発展過程とし理解され、「盃事」は「神事」を継承するかたちで「神事」を発展させるものであり、芸能の形成において必要不可欠な要素であることを再確認した。(第三章「神楽の成立と変遷 - 鎮魂祭を中心として -」)。

第四章では、日本古代の芸能の本質と理解される御贄と祭祀との連関性について、御贄と芸能の関係を伝える吉野国栖の祭祀への供奉のあり方を通して検討を行った。その結果、吉野国栖は年間を通して諸祭祀に供奉していること、祭祀は季節ごとに執り行われることから、季節を象徴する祭祀に奉られる御贄も同様に季節を体現するものであると考えられる。そのため、祭祀によってつくられる「季節」のなかで執り行われる芸能は四季を表現するものであると理解できることから、日本の古代芸能は「季節」とともにあること、日本の古代王権は祭祀を通してイデオロギー支配を可能としていたことを指摘した。なお、「季節」によって芸能に求められる役割は異なることから、芸能とその担い手との関係、吉野国栖に代表される芸能の担い手が中世において卑賤視されていく歴史的過程について検討する必要があるが、その検討は今後の課題としたい。(第四章「日本古代芸能と御贄 - 吉野国栖を事例として -」)。

むすびにかえてでは、これまでの検討結果の整理を行った上で、①仏教儀礼や宮廷儀礼における芸能の役割、②祭料の弁備と使用方法、③直会と中世の宮座との連関性、④芸能の中核をなす要素である「奏楽」を構成する雅楽およびその演奏を担う雅楽寮のあり方、⑤芸能に用いられる楽器や楽面などの道具の流入、⑥芸能の担い手と彼らを中心につくられる文化とその変遷、などを今後の研究課題として改めて提示した。